西高だより

第14号
2018年9月1日
発行数：2000部
編集長：竹林　進
事務局：
札幌市中央区
南1条西11丁目
MSマテリアルビル4F
浅野法律事務所内

つゝじヶ丘同窓会
第53回札幌支部総会

平成30年10月20日（土）「ホテルマイステイズ札幌アスペン」に於いて開催

ご挨拶

札幌支部長　浅野　元広（18回生）

つゝじヶ丘同窓会札幌支部の皆様におかれましては、ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、西高は、いよいよ平成31年3月に閉校となり、同年4月に新設校が開校されます。このため、西高の来年度（平成31年度）の新入生の募集は停止され、西高ではない新設校の新1年生の募集が始まります。そして、在学中の西高の新2，3年生は、西高が閉校されることにより新設校の2，3年生に編入されます。

他方、統合の対象である稜北高も来年度（平成31年度）から新入生の募集が停止されますが、稜北高に在学中の新2，3年生は、そのまま稜北高に在籍し、稜北高は2，3年生が卒業する平成33年3月に閉校となります。

このように、西高の閉校→新設校の開校→西高2，3年生の新設校への編入→稜北高2，3年生の卒業→稜北高の閉校という流れで、西高と稜北高とが統合されるわけですが、校舎は、現在の西高の校舎が新設校の校舎としてそのまま使われ、また、西高の2，3年生は新設校に編入される一方、稜北高の2，3年生はそのまま稜北高を卒業します。

従って、外観的には西高は新たな名称でそのまま存続し、稜北高が2年後に廃校（閉校）になるという印象もあります。それならば、新設校の名称も「函館西高」のままでよいのではないでしょうか。

私が在校していた時期（昭和40年～42年度）は、1学年で普通科9クラス、家庭科1クラスであり、各クラス約50名位だったと思うので、1学年の生徒数は約500名ということになります。

これに対して、現在の西高は1学年3クラスで、各クラス約40名、1学年の生徒総数は約120名にすぎず、稜北高も同様だと思います。この生徒数を見ると、両校の統合はやむを得ないのでしょう。

全国的に少子高齢化が進行し、また、地方都市の人口減少も続いています。総務省から今年1月1日時点での道内人口が発表されましたが、それによると道内人口は348,025人減少し、道内市町村では函館市の人口減少が1番多く、3,020人のの減少（函館市の人口は261,572人）になっています。

また、全国では小中高合わせて年に500もの学校が消えていて、北海道では年平均50校、減少しているのだそうです（平成30年7月20日朝日新聞朝刊「天声人語」）。

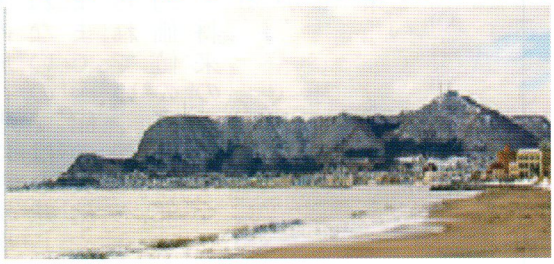
こういう時代が来ることは予測されていたとはいえ、全国的な人口減少と大都会への一極集中の行き着く果てがどうなるのか、私には見当もつきません。

しかし、如何に人口が減少しても函館山と大森浜に縁どられた故郷函館の風景の骨格が変わるはずがありませんし、西高が閉校となって新設校が開校されても、あの八幡坂の上に立つ母校の姿には何の変りもありません。

また、人生のある時期を西高の生徒として過ごした過去を忘れることは有り得ても、消えてなくなることはありません。つゝじヶ丘同窓会は、西高の同窓生がいる限り、西高の閉校と関わりなく存続していくものと考えています。

今年は西高が存在する最後の総会・懇親会ということになりますが、西高が閉校になるからといって、つゝじヶ丘同窓会が来年3月になくなるわけではありませんので、今年の札幌支部の総会・懇親会では特にセレモニーめいたことは行わず、例年通りの内容で普通に行います。

どうか、多くの老若男女の同窓生の方々に総会・懇親会にご出席いただき、西高の閉校や故郷に対する思い等を語り合いたいものだと思います。また、末尾ながら同窓生の皆様方のご健勝をご祈念申し上げます。



「2018年、函館西部地区散策記」

戸根谷　法雄（21回生）

平成30年（2018年）は、明治元年（1868年）から数えて満150年になる。明治維新150年を記念するこの年。

明治維新の立役者となった薩摩藩下級武士「西郷隆盛」を描いたNHK大河ドラマ「西郷どん」が1月7日からスタートした。織田信長の「人生50年」、江戸時代の平均寿命は30～40歳といわれる。現代社会では男性平均寿命が80歳を超えた。

そう考えれば、戊辰戦争終結で大きく世の中が変わった時から、僅か人生2回分。150年という歳月が妙に身近に感じられるのは自分自身が高齢化したせいだろう。あの時代、先祖はどこで何をしていたのか。そんな疑問は若い時には考えもしなかったことである。

作家の五木寛之氏は著書「林住期」の中で、「一人の人間としてこの世に生まれて来たこと自体、実は奇跡的なことである。それほど希有で、貴重な機会を得た私たちは、その自己に対しての義務を果たさないといけないのだ。本来の自己を生かそう。自分を見つめよう。心が求める生き方をしよう」と説く。

つゝじヶ丘同窓会札幌支部50周年記念講演の森真沙子さんの「箱館奉行所始末」から近著「時雨橋あじさい亭」を読むにつれ幕末動乱期の史実に興味がわいてきた。

今から30年前の1988年、日本テレビ年末時代劇スペシャル第4作で「五稜郭」が放送された。その当時は興味がなかったが、DVDを購入して鑑賞してみた。主に箱館戦争を通して榎本武揚の半生を描いた作品である。「幻の蝦夷共和国」総裁となった榎本武揚を里見浩太郎が主演し、数多くの名優が出演している。

この影響もあって、これまで帰函する機会はあっても訪れることがなかった五稜郭公園に再現された「箱館奉行所」や母校周辺を散策してみることにした。

2018年1月6日（土）

五稜郭電停から函館ドック行きの市電に乗り、函館駅前を経由して末広電停で下車。母校通学も函館駅前から末広電停で下車していた。当時と同じルートで八幡坂に向かう途中、電車通りに旧金森洋品店があった。ハイカラ・函館文化を象徴する建物である。現在は市立函館博物館郷土資料館となっている。入口をのぞき込んだら案内の方に導かれた。当館のコンシェルジュで、まちあるきガイド「縁ジョイ倶楽部」代表の加藤さんが館長の今泉さんを紹介してくれた。加藤さんが丁寧に1時間以上も案内してくれて、幕末から明治にかけての函館の様子をじっくり鑑賞できた。向かいにある函館市文学館で佐藤泰志の展示を見て、八幡坂を登った。当時の石畳の坂道とは違い、アスファルト舗装であったが路面には積雪が多くあった。

1996年グリコ・ポッキーのCM以来「函館のポッキー坂」といわれて、2013年日経新聞社「観光で訪れたい坂の名所ベスト10」で堂々1位となった八幡坂も、さすがにこの時期は観光客もまばらで、中国人観光客数名が母校の坂から記念撮影をしていた。校庭内から函館山を仰ぎ、巴湾を見下ろし、いまさらながらにロケーションのすばらしさを実感した。雪深いハリストス正教会から聖ヨハネ教会を抜け、水元公園、ローブウェイ山麓駅前から護国神社に参拝した。ここには戊辰戦争で戦没した将士を追悼する多くの墳墓や名碑、弔碑が祀られている。護国神社坂を下り高田屋嘉兵衛銅像を横目に、千秋庵本家の「どらやき」を買う。札幌にも千秋庵があるが、ここの「どらやき」は一味も二味も違う。我が家の定番土産である。宝来町電停から十字街電停までの電車通りは人影もまばらで、アーケード街には空き地も多く目立っている。長時間の散策の後、十字街から駅前に移動し美鈴珈琲で一服した。高校時代にはこんな贅沢は考えられなかった。新しい函館の顔として誕生した駅前の「キラリス函館」にはカフェ&バー「PRONTO」や「回転寿司・根室花まる」の看板が大きく目立つ。（函館なのに函館でない？）何かそんな異様さを感じた。

大門を歩いて松風町から新川電停で下車。自由市場に立ち寄り、再び五稜郭公園電停まで市電に乗車した。土曜の夕刻にもかかわらず車内は市民で混雑していたが、数名の外交人観光客の乗車マナーを無視した行動に、電停ごとに乗車する市民も、後方から下車する乗客も困惑し迷惑極まりない状態だった。

新幹線開通以来、観光ブームが続く函館ではあるが経済効果を期待できるホテルや飲食店、土産店はさておき、海外からの旅行者にはツーリスト等を通して行政がきちんとしたマナー、ルール順守の指導を行わなければ、一般市民の生活や国内旅行者に悪影響を与えかねないのではと感じた。このままで函館の文化や歴史は守られていくのだろうか。歴史的価値の高い西部地区の保全と将来のまちづくりはどうなるのだろうかと考えさせられた散策となった。

市電専用の一日乗車券は大人600円でガイドブック付きと、安価で利用価値があった。

「やきもの」

菅井　俊樹（19回生）

私の住む江別では、毎年7月、全道のプロ・アマ陶芸家達が出店する「やきもの市」が開かれます。規模的には大きく、結構にぎやかなイベントになっています。

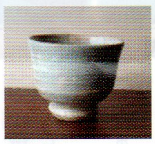
どうして江別で「やきもの市」が開かれるようになったのかというと、実は江別の歴史に深く関係しています。

明治時代、開拓使によって、建築用レンガの生産が推奨されました。江別でレンガの製造が本格的に開始されたのは、1891年（明治24年）だそうです。現存する道庁赤レンガ庁舎、サッポロビール園などは、江別産レンガが使われています。

でも、なぜ江別なのか？それは江別にはレンガに適した野幌粘土が産出されていたからです。また、江別には道立窯業試験場もあったくらいで、一大産業地と位置づけられていたということでしょう。

私の家の近くにもレンガ工場があり、かなり前に、隣家の親父が勤務していたので、見せてもらいました。

成形された乾燥粘土が、長いトンネル状の窯の中をゆっくり進み、出口では焼き上がったレンガになっていました。昔は、広い土地を利用し、登り窯で大量製造していたようです。



第1回の「やきもの市」が開催されたのは、1990年（平成2年）です。江別でレンガ作りが本格的に開始してから100周年を記念して開催されたということです。以降、毎年開催され、今年で29回目になります。

第29回えべつやきもの市

その後に見学した「[illegible]館奉行所」については、また次の機会があったら書いてみたいと思います。

「レンガ」から「陶磁器」へと変化して、江別はやきものの街になりました。

市の施設の「セラミックアートセンター」では、「レンガ」や「やきもの」の歴史が見学できます。ここには道内の陶芸家達の作品が数多く展示されていて、その中に、北海道陶芸の先駆者で、江別に北斗窯を開窯し、1962年（昭和37年）に亡くなった小森忍の記念室が設置されています。東大教授で「九条の会」事務局長の小森陽一は孫にあたります。

セラミックアートセンター

江別市内には、十数軒（もっとあるかも？）の陶芸家がいて、野幌粘土を活用して食器類などを作っています。焼く窯の種類としては、電気窯が多いようです。その他にもガス窯、薪窯などがありますが、私が一番面白いと思うのは薪窯です。窯の中は、1230℃前後、薪の灰が舞い上がり、やきものに付着し、それが自然の[illegible]となり、灰の被り具合、置く場所により、二つとない作品が出来上がります。ただ、あまり高温だと粘土が溶けて変形したり、くっついたりします。

薪を数日間燃やし続けるため、住宅密集地では難しいものがありますが、札幌芸術の森にレンタルの登り窯があります。プロの陶芸家の究極は、薪窯では？と思っています。

登り窯と言えば、西高同期の秋草調子が、登り窯を舞台にした作品を書きたいと話していました。西高卒業生に文学に関わる人が多いですが、彼女もその一人です。今、どうしているか？

秋草調子は、1988年（平成元年）短編小説『提灯』で第43回栃木県芸術祭文芸賞創作部門で受賞し、1994年（平成6年）に『変だよニッポン人』を出版しました。

もう、何年も前の話ですが、北海道新聞文学賞を受賞した北村巌（西高18回生）が、辻仁成（芥川賞作家で西高卒業）を札幌に呼び、講演会を開きました。その時に、声をかけて辻と一緒に来てもらったのが、秋草調子でした。西高同期ということでしたが、私には記憶がなく、事実上初対面？だと思い、丁寧に挨拶しました。

話しているうちに、登り窯に興味があったようで、話の流れで、私の作品の写真を送ってくれ、ということになりました。内心、本当にイヤだった。お見せする程のものはなく、しかも、登り窯ではなく電気窯で焼いたものばかりだったから。それでも、精一杯の見栄を張り、まあ、これだったらと思われる抹茶碗や花瓶の写真を送ってしまいました。もう、あんな恥ずかしいことは、金輪際しないと誓いました。

陶芸作品は、色や形など陶芸家の個性・特徴が表現されています。北海道に居て備前焼や益子焼など道外の有名産地の土にこだわる作家や本州の土と地元産の土をブレンドする作家など様々です。ですから、求める側もそれぞれの好みでやきものを選択します。その陶芸家のファンが多ければ、やきもの市での売り上げが増えることになります。

会報が届く頃は、やきもの市は終わっていますが、興味のある方は来年、江別へ行ってみてください。

『きみの鳥はうたえる』絶賛上映中！

成田　明（19回生）

函館西高出身の作家、佐藤泰志（18回生）の小説『きみの鳥はうたえる』が映画化され現在札幌で上映されています。過去に函館3部作として、『海炭市叙景』（2010）、『そこのみにて光輝く』（2014）、『オーバー・フェンス』（2016）が映画化されており、3作とも「キネマ旬報」ベストテンに入賞するなど高い評価を得ています。この原作は第86回芥川賞（1981年下半期）候補となった作品です。

原作では、東京郊外の書店で働く主人公「僕」と失業中の友人「静雄」、「僕」と同じ書店で働く「佐知子」の若者3人の揺れ動く微妙な関係を描いています。前3作と同様に函館シネマアイリスの菅原和博代表が企画・製作プロデュースを務め同館の20周年記念作品となりました。監督には、札幌出身の三宅唱監督を起用しました。三宅監督は1984年に札幌市東区で生まれ、札幌北高校、一橋大学を卒業後2010年に札幌を舞台にした『やくたたず』で長編デビューを果たし、『playback』（2012）で第22回日本映画プロフェッショナル大賞新人監督賞を受賞した新進気鋭の若手監督です。映画化に際して、舞台を東京から函館に移し、現代の物語として昨年6月に3週間の全編函館ロケを敢行しました。出演は、「僕」に『素敵なダイヤモンドスキャンダル』（2018）の柄本佑、友人の「静雄」に『空海ーKUKAIー美しき王妃の謎』（2018）の染谷将太、「佐知子」に昨年のキネマ旬報ベストワンに輝いた『映画　夜空はいつでも最高密度の青色だ』（2017）に主演し同新人女優賞を獲得した石橋静河が演ずる。

7月21日の完成披露上映会で「石橋静河はとんでもない女優になる。早く撮っておきたいと思った。撮影中、隣の男性が違うだけで女の姿が変わってゆく。3週間の撮影で最初と最後ではどんどん変わっていった。すごい女優です。ラストカットは石橋の顔、これが最後のシーンとなりました」とは監督の弁。

原作小説の世界が30数年の時を経てスクリーンに甦ります。あのお馴染みの酒場も登場します。是非とも映画館に足をお運びください。

上映館：シアターキノ
狸小路6丁目南3条グランドビル
電話（011・231・9355）
9月21日まで上映
※延長があるかもしれません。

原作　佐藤泰志
監督　三宅　唱
出演　柄本　佑
　　石橋静河
　　染谷将太
音楽　Hi、Spec
製作　函館シネマアイリス
制作　Pigdom

同期会17回生古希の集まり

平成30年6月10日（日）函館「五島軒」において17回生の同期会が行われました。

今年は節目となる「古希」の年にあたり109名（男性48名、女性61名）が参加しました。

今までの同期会の参加人数としては最多となりました。

10年前、平成20年、60歳還暦の祝いを「鹿部ロイヤルホテル」で行い、80名が参加しました。今回はその参加人数を上回ったことになります。

函館の幹事は、この同期会をもって一区切りとしたいとのこと。このため全体で集まるのはこれが最後？となるかもしれません。今までの歴代幹事の努力に感謝です。

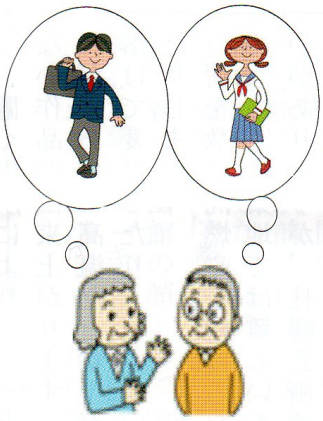
午後5時半より始まり2次会も含めて10時頃まで長時間にわたり盛り上がりました。

さらに翌11日（月）は、ミニ就学旅行と称して「登別温泉」に25名が参加し1泊しました。幹事さんほんとうにお疲れ様でした。

同期会の印象は個人的な差は多少あるものの総じて女性のほうが元気です。私も含めて男性陣は残念ながら元気さでは負けているように見えました。同期のみんなが平等に年齢を重ねてきた今、みんなの容姿が平均化されてきた？。

みんな笑顔で楽しい時間を過ごしました。

（17回生　竹林）



【原稿募集】
皆様からの投稿をお待ちしております。
【札幌支部事務局】

【編集後記】

西高と稜北高の統合については、平成31年4月に新設校としてスタート。

校名については、今年10月頃、道議会を経て、官報やホームページで公表する予定。

10月20日の「札幌支部総会」の頃には新しい校名が決まっているかも知れません。

来年5月1日に施行される新しい元号とともに、新設校も生徒にとって希望のスタートになって欲しい。

（竹林）